推敲

賈島、挙に赴きて京に至る。
驢に騎りて詩を賦し、
「僧は推す月下の門」の句を得たり。
推を改めて敲と作さんと欲す。
手を引きて推敲の勢ひを作すも、
未だ決せず。
覚えずして大尹韓愈に衝たる。
乃ち具さに言ふ。
愈曰はく、「敲の字佳し。」と。
遂に轡を並べて
詩を論ずること之を久しくす。

（唐詩紀事）

賈島は、科挙を受験するため都へやってきた。
ろばに乗って詩を作り、
「僧は推す月下の門」という句を思いついた。
「推す」を改めて「敲く」に直そうとした。
手を伸ばして押したり叩いたりする動作をしてみたが、
まだ決められなかった。
うっかりして都の長官韓愈の行列に衝突してしまった。
そこで賈島は韓愈に事情を詳しく話した。
韓愈は「『敲く』の字のほうがよい。」と言った。
そのまま二人は馬を並べて進みながら
長い時間詩を論じ合った。

漁父の利

蚌方に出でて曝す。
而して鷸其の肉を啄む。
蚌合して其の喙を箝む。
鷸曰はく、「今日雨ふらず、
明日雨ふらずんば、即ち死蚌有らん。」と。
蚌も亦鷸に謂ひて曰はく、「今日出ださず、
明日出ださずんば、即ち死鷸有らん。」と。
両者相舎つるを肯ぜず。
漁者得て之を幷せ擒らふ。

（唐詩紀事）

貝がちょうどそのとき水から出て日に当たっていた。
するとしぎが貝の肉をつついた。
貝は殻を閉じてしぎのくちばしをはさんだ。
しぎは言った。「今日雨が降らず、
明日も雨が降らなければ、すぐにお前は死んでしまうぞ。」と。
貝もしぎに向かって言った。「今日くちばしを放さず、
明日も放さなければ、すぐにお前は死んでしまうぞ。」と。
両方ともお互いに放そうとはしなかった。
そこに通りかかった漁師が両方一緒に捕らえてしまった。

杞憂

杞の国に、人の天地崩墜して、
身の寄する所亡きを憂へて、
寝食を廃する者有り。
又彼の憂ふる所あるを憂ふる者有り。
因りて往きて之を暁して曰はく、
「天は積気のみ。処として気亡きは亡し。
屈伸呼吸の若きは、
終日天中に在りて行止す。
奈何ぞ崩墜を憂へんや。」と。

（列子）

杞の国に、天地が崩れ落ちて、
身の置き所がなくなるのを心配して、
寝ることも食べることもできないでいる者がいた。
さらに彼が心配していることがあるのを心配する人がいた。
そこで出かけていって彼に教え諭して言った。
「天は大気の集まりにすぎない。どこであろうと大気のない所はない。
人が体をかがめたり伸ばしたり息を吸ったり吐いたりするようなことは、
一日中天の中で行動していることなのだ。
どうして天が崩れ落ちることを心配する必要があろうか、いや必要ない。」と。

さらに、その心配する人が、「太陽・月・星が落ちはしないか。」「大地が崩れはしないか。」と言うと、教え諭す人が、「太陽・月・星も大気の中で光っているものだから、落ちてきたとしてもぶつかってけがをすることはない。」「大地は土の塊にすぎず、四方の果てまでぎっしり詰まっていて崩れることはない。」と言った。その心配していた人はすっかり心が晴れて喜び、教え諭した人も安心して大いに喜んだ。

呉越同舟

善く兵を用ゐる者は、譬えば率然の如し。
率然は、常山の蛇なり。
其の首を撃たば則ち尾至り、
其の尾を撃たば則ち首至り、
其の中を撃たば則ち首尾倶に至る。
敢へて問ふ、
「兵は率然の如くならしむべきか。」と。
曰はく、
「可なり。夫れ呉人と越人と相悪むなり。
其の舟を同じくして済るに当たりて、
風に遇はば、其の相救ふや左右の手の如し。」と。

（孫子）

うまく軍隊を使う者は、たとえるなら率然のようなものである。
率然とは、常山にいる蛇のことである。
その頭を攻撃すると尾が助けに来て、
その尾を攻撃すると頭が助けに来て、
その胴体を攻撃すると頭と尾がともに助けに来る。
あえて問う。
「軍隊を率然のようにさせることができるか。」と。
答えて言う。
「できる。そもそも呉の国の人と越の国の人とは憎み合っている。
同じ舟に乗り合わせて渡るときに、
強風に遭ったら、そこで助け合う様子は左右の手のような関係である。」と。